

地域情報（県別）

【鳥取】「入浴中の急死、実は熱中症」予防法医学にも注力-飯野守男・鳥取大学医学部法医学分野教授に聞く◆Vol.3

県内の異状死を論文化、救急隊への問題提起も

2025年4月11日（金）配信 m3.com地域版

「法医学者の仕事は死因究明だけじゃない」――。全国でも少ない専門家として多くの症例に対峙してきた鳥取大学医学部（鳥取県米子市）法医学分野の飯野守男教授は、「避けられた死」の再発を防ぎたいと、予防法医学にも力を注ぐ。県内で起きた異状死を論文化して救急隊に問題提起し、入浴中の突然死の多くが熱中症だとして注意を喚起。飯野氏が編み出した死亡時画像診断（Ai、オートプシー・イメージング）の手法も絡めて、印象的な症例を聞いた。（2025年2月28日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



飯野守男氏（本人提供）

ホームレス殺人事件の身元判明に独自の手法を考案

――飯野先生は全国でも少ない法医学者として、多くの異状死の死因究明に臨んできました。印象的な症例を教えてください。

先ほど話した「スーパーインポーズ」という手法を思いついた症例は印象深いです。それは2011年ごろ、大阪で起きたホームレス殺人事件です。犯行グループは保険金目当てにホームレスの男性を誘い、養子縁組してから多額の生命保険をかけました。その後、事故に見せかけて男性を車でひき、彼は障害者に。グループは保険金を得た後に彼を殺害し、遺体を山に埋めました。殺害から1年ほどが経ち、骨だけが見つかりました。

当時、大阪大学で講師を務めていた私に、警察から相談がありました。男性の頭蓋骨を持ってきて彼の名を挙げ、「おそらくこの人のものだと思いますが確認できませんか。生前の事故時に撮ったCT画像は手に入ります」とはいえ、CT画像と骨では比べられませんし、当然ですが、CT画像を骨にはできません。私は思案し、まずは骨をCTで撮って画像化することを思いつきました。次に双方の画像をどう比較するかですが、これにはCTソフトの応用を考えました。CTには複数の画像をコンピューター処理して重ね合わせる「フュージョン」という機能が組み込まれています。臨床では時間の経過に伴う肺炎やがんなどの病気の変化を調べるためのもので、それを法医学に応用すればいい

のではないかと思ったのです。数日にわたって試したところ、男性が生前に撮ったCT画像と骨の画像にあった特徴がびたりと一致し、この人だと断定できました。今では5〜10分ほどで身元確認が可能です。

心臓マッサージ中の死亡事故受け、救急隊の指導に問題提起

——スーパーインポーズは先生が実施後、国内外で行われるようになったそうですね。2015年から教授を務めている鳥取大学での症例はいかがでしょうか。

鳥取県の印象的な症例では、2024年に論文として発表したものが挙げられます。異状死の中にはときどき、夫婦2人が同じ部屋で亡くなっているものがありますが、論文化したのは肺炎で倒れた妻を夫が発見して救急要請したものの、救急隊が到着したときには2人とも倒れていた、というケースです。実は、夫は電話を通して救急隊から心臓マッサージの指導を受けて実施したのですが、その最中に心筋梗塞を発症して亡くなってしまったのです。夫には心筋梗塞の既往があり、バイパス手術を受けるなどしていたことが後に明らかになりました。2人とも、私が解剖を行いました。

論文にしたのは、問題提起のためです（胸骨圧迫中にバイスタンダーが急死した一例）。心臓マッサージは行う人にとって激しい運動になるので、救急隊は指導前に対象者の年齢や病気の有無などを確認した方が良いのではないかと提案しました。

「お風呂の熱中症に注意」県も広報誌やCMで注意喚起

——その症例に絡めてですが、先生は予防法医学にも取り組んでいるとか。

私が留学したビクトリア法医学研究所があるオーストラリアのビクトリア州では、コロナ制度のもと予防法医学に注力しています。突然死や暴行死、事故や自殺などによる死を「避けられる死」と捉え、対象事例のデータベース化や再発予防のための分析が行われているのです。こうした制度に影響を受け、私も日本で予防法医学に取り組む中、特に注目しているのが入浴中の死亡事故です。

交通事故で亡くなる人は全国的に減少しており現在は年間3000人未満ですが、入浴中の死亡例はその6倍以上、およそ1万9000人に上るといふ推計もあります。入浴中の急死といえば「ヒートショック」によって血圧が乱高下し、脳卒中や心筋梗塞などを起こすイメージを持つ人がいると思いますが、実際のところ、最も多いのは熱中症ではないかと考えており、研究を進めているんですね。

これは大阪大学時代の上司であり、熱中症の研究に注力する黒木尚長先生（千葉科学大学危機管理学研究科教授）が提唱した考えです（入浴事故の危機管理：なぜ、入浴事故が起こっているのか）。現在、追いだき機能付きの浴槽が普及したことで湯温を保てるようになりましたが、高温のお湯に長くつかると体温が上がってのぼせてしまい、浴槽から出られなくなってさらに体温が上昇、重い熱中症の状態になって意識を消失し、溺れてしまうことがあります。

私は過去、入浴中の死亡事故が起きた際、検視官から遺体の情報だけを得ていましたが、今は追いだき機能の有無や設定温度など浴槽の状況も調べてもらうようにしています。私が「お風呂の熱中症に注意」と言っていることもあってか、鳥取県も夏にしか行っていなかった熱中症対策会議を冬にも開き、ホームページや広報誌、CMなどでも注意喚起してくれています。

10LDKの古民家でシェアハウス運営

——法医学者として活動する一方、先生は鳥取大学医学部の留学生向けにシェアハウスを運営していると聞きます。「法医学者がなぜシェアハウスを？」と興味を覚えました。

きっかけはたまたまで、私の地元の友人に空き家対策を専門にしている不動産業者がいたんですね。地方では空き家が増えておりそこに注目したビジネスです。近年、自治体も「空き家バンク」としてウェブサイト上などで空き家

の情報を公開し、空き家を貸したり売ったりしたい人と、借りたり買ったりしたい人をつなぐ仲介をしていることもあります。私は「空き家で困っている人がいるから買ってほしい」と、なかば友人から言われるまま購入しました。ちょうどその頃、私の教室にブータン人の留学生がいたので、2022年から留学生向けにシェアハウスにした次第です。

私が買った古民家は10LDKもの広さがあるので、ブータン人の彼が他の留学生も誘って最初は3人でスタートし、以後、継続して複数人が入居してくれています。私はDIYが好きなので、留学生の入居前に自分でトイレやキッチンを改装し、抜けていた床も補修して自分なりにリフォームしました。私も留学経験がありいろいろな人にお世話になったので、当時の恩返しと言いますか、そんな思いもあります。

診療放射線技師の加入望む、後継者育成も喫緊の課題

——最後に、今後の展望をお聞かせください。

法医学者は全国的に人が足りていないので、関心のある人は社会的な意義や使命感を感じやすい分野だと思います。その一方で、自分一人では仮に診断を間違えていてもそれを正せない不安は常にあります。私の場合、相談相手がおらず、答え合わせができないことが課題です。

その意味でも、チームのメンバーを増やしたいです。私は現在、法歯学者の中留真人准教授とタッグを組んでいますが、Ai（死亡時画像診断、オートプシー・イメージング）を行っているため診療放射線技師にも加わってほしいと考えています。それと、後継者の育成も喫緊の課題です。法医学に興味を持ってくれる医学生は多いのですが、もう少し長期に見た場合、医学部に進む前の中高生の頃から法医学に触れる機会をつくれたら、と思います。

私はオートプシー・イメージング学会の副理事長を務めており、2025年8月23、24日に大会長として米子市で第23回となる学術大会を開きます。先ほど話したブータン人の元留学生や、京都アニメーション放火殺人事件の死刑囚の治療に当たった鳥取大学医学部附属病院高度救命救急センター長の上田敬博先生も招きます。同センターで亡くなった人は全てAi撮影をしているので、上田先生には「救急とAi」をテーマに話していただく予定です。県内の先生方は気軽に来ていただけるとうれしく思います。

◆飯野 守男（いいの・もりお）氏

1997年鳥取大学医学部卒。鳥取大学医学部附属病院麻酔科での研修後、京都大学、大阪大学、慶應義塾大学などに勤務し、2015年から現職。2008年にオーストラリアのビクトリア法医学研究所で死亡時画像診断を研究し、帰国後、国内で先駆的に導入した。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

